



## 針葉樹會報

あら・す・ご・い・く・わ・い

鬼のはいてる虎の皮のパンツまでが、越中式で、兎角前から外れ勝な御時世に、例會當日、思はぬ雜務に早朝から飛び歩いたとて、別に不思議は無い譯だが、ベンちやんと共に、熊さん快心の傑作たる、ピックアップを流れ出る、あの麗朗な「新世界」の韻律に思はぬ時間を浪費したのは些か申譯なき次第、何は扱て、早速、熊さん第二世東京産の謙一君にも綠の空氣を御馳走とあって共々國立に飛ばしたが、最早遲刻は遁れまい。

折から絹糸の様な五月雨に軟く烟つた學園は、ソフトフォーカスのよさに生きて萬象あやかな情懷に息づいてゐるかに覺はれた。

オイッ!! 突然、ブルーベルの窓に聲あつて、見降す顔は正しく近ちやん、後に家子郎黨を控へての一睨だ、遅刻? 仕舞つたと思つたがもう遅い、針葉樹きつての古強者、踵を接しての強襲だ「一體何をしてたんだ、俺は十時ジャストに來た!」濱の方が

早いのは如何?」唯々、恐縮、先づ以つて一言も無い。味方と思つた熊さんまでが「俺が通知を出したやうで問題が起るといけねエ、放送局のと断つて呉れ」その豹變振りだ。「だが間違つて困るのはどつちだね」松木さんの一言や誠に感銘、渡に舟で、大急ぎ、マイクを抱いて部室に移る。さるにても、已れの名が己れに通せぬとは仍々情けなき世の中かな。これと言ふのも、なまじ人間味ある爲ならんと些か氣持が變になる。蓋し妖怪變化、この道の權威の巣喰ふくなれば、同じ穴の何とかやら、いつかは仲よく油揚でも囁るやう修業も積まさなるまい、序にトカゲの手摺み?

こればかりは難行苦行の更に難、とても修業は覺束ない——。

仍て、思出もまた懷しい、雜木林の山小舎に、酒と情の火を焚いて、和みの堀場に驩を交へる。宴酣と盛る頃、静まの松に呼魂する軽い響のエンデンに、顔々、目と目を見合せる。転て雲氏夫妻の御入來と分るや、拍車をかけての高潮振り。皿が廻れば飯が賣れ、杯が踊れば眼も廻る。砂糖だ! 醬油だ! 辛れエゾ! 甘めエゾ! 料つてから召し上る事三回戦。キヤムブの癖も現れて、どうも餌を與へるやう一巡る酒杯も赤鬼づれで、冷もよければ熱燗結構、お銚子の底を軽く叩いて燗ごろを見る、孫さんならでは及ばぬ仕業、溢れる奴を待て暫し、平に揃へた三本指で、スーツと掬つてスポット舐める、いや早、至れりや盡せる妙技、蓋し斯道の奥義を極めたりとや言はものみ。お毒味の秀逸は濱の仁、最早立派な家庭型。七輪の尻をバタバタと轍の役は、松原の旦那が板につく、いつそブーツと吹いて貰へば雑作もなさそうに、とは誰でも一度は

考へる。何から何までアル中だ。おい本當の普通の茶を呉れ！何、葉つばの茶かい？ これぢや、エンタツ・アチャコの掛合だ。二回戦、汁は薄れて、宛ら肉のおでんの煮込み、さらばと忽ち自動車飛ばして、酒屋通ひは、チト贅澤です。それは扱て御相伴の夫人こそ誠に御迷惑千萬、「オイ來いヨ」如何に夫君の命令とは言へ、大江山のそれとも紛ふ小舎の中は、チト素直には這入れません。一瞥、忽然、アラ物凄い！と岩戸ならぬセダンの扉を閉られたのも、御尤も至極。サア後が問題だ。誰の故だと、入れ代り立代り、戸口に立つて、及び腰での實驗だ、「アレ近ちやんまでしか見えねエゾ」御戯談でせう。とは言ふものゝ、俺では無いとはよう言はぬ。さてはこベンちやんの目が光る。唯目だけです。目が服を着て趺坐をかいて酒を飲む、いつか本箱の色に解消したとは物凄エ。

仍てお座敷換へでもあるまいが、一息容れると、お顔は赤いが乙に澄した御面々、お猿芝居のおしかよろしく、何のかんのこ固つて、熊さんのカメラに修つたのは先づ目出度い。得難き紀念寫眞となるのだが、何分にもシャツタ一押す手のオツシレーシヨンが氣に掛る——。軽て今晚出張を控へた孫さんは後髪をひかれる思ひで——それでも夏蜜柑を一つ大切に抱へて、雲氏の車に便乗し、行けれゝを合圖に歸れゝをきめる。その後は更に興が彈んで爆笑呵々と日暮に及ぶ。ガチャ／＼と集つて、ボーとほ照つて夢中になり、何が何やら分らずに散つてしまふ。いつもながらの姿である。別に改つた型もない。元よりしかつめらしい御高説があ

るでなし、唯あるものは、和の一氣。何を喋辯つたか薩張り判らない、然もそこには無限の驩談漫語あり、快笑愉悦が汪れ出て、何の蟠りもある筈がない。斯くて豫期の驩を盡し、心満ちた思ひで解散したのは、五時を少し廻つてゐたらう。終日烟つた五月雨のなきの糸もこまやかに、三々五々、林の中を濡れて行く。一時怪氣に怯へた謙一君も今は元氣で、近ちやんの腕に抱つこしてゐる——すべてが唯愉快な、和かな一日であつた。(木公)

### 富士山文献解題 (二)

増山清太郎

野中千代子「英華日記」(雑誌「小國民」第十一年第十四號所載)

明治三十二年七月北隆館發行)

前回に述べた野中至夫人千代子が、夫に従つて山頂に冬期觀測

に従事した記事である。

千代子、明治四年福岡縣那珂郡警固村に生る。父は梅津只圓、母糸子は野中氏の出である。明治二十五年野中至に嫁し、翌年一女その子を生む。

明治二十八年夏、至が冬期觀測の準備に出掛た留守に、千代子は山頂に於ける夫の多忙さ、萬一病氣に罹つた場合を豫想し、自分も共にせん事を姑に願つた。姑曰く「それは自分の方から頼み度い處であるが、お前の身に危険が來てはお國元の兩親に相濟まないし、且つ至のする事は世の常でないから、縱令従はずとも婦道に背く事はあるまい」と許さなかつたが、山麓に行つて準備

を手傳ふ事を命じたのであつた。千代子は秘に登山の決心を以てその子を携て離京し、山麓に在る事一ヶ月餘、準備も整つたので東京へは歸らず一旦實家に赴いて、その子を預け、新雪の富士山頂に夫を訪れて共に観測に従事した。その動靜を自分で書綴つたのが「芙蓉日記」である。

「富士案内」には観測の結果、登山の模様などは委しいが、日常生活振りが書いてない。芙蓉日記は流石に女の筆だけに、富士案内の缺を十分補つてゐる。即ち夫妻は山頂に在つて観測や看病のあいまくには、専ら歌を作つて閑を消してゐたのである。

頂きは人しなければ二はしら降りし御代の心地こそすれ

うた人の眺めのみせしふしのねを御代の光となさしものを  
など、巧は拙いが實感のあふれるを覺える。報効義會の群司成忠と、山麓の有志が、人を派して頂上を訪れさせたのは、最も兩人を喜ばせた。

明治前期のインテリモガの美文であるから少々読みにくいけれども、立派な文章だ。特に下山を拒む夫妻を、和田雄治が脅しつすかしつ、連れ戻らうとする條など、再讀なほ飽かぬものがある。丁寧に讀んで見るご、「富士案内」の記述に誤のあるのも判る。(この事は次回にも述べる。)

終に文中に引用された、千代子の手紙二通を擧げて置かう。

其ノ一 登山準備を済ませて、實家へ行く途中、東京の姑に送つ

た手紙、文中「おこさま」といふのは、千代子の義妹で、その子と同月に生れた。姑に乳が少ないので、千代子は自分の乳を與へて育てゝゐたのである。

取急ぎ一筆申上うり、至様御事、此度彌御登り遊はし、此後八九ヶ月の間、御一人にてあけ暮にたきのわざ迄も御世話遊はすやうにては、日頃如何にすこやかにおはすことは申しながら、萬一の事ともおわし候は、是迄の御心盡し相くだげ、御痛はしう候へは、是非にわらは御供致し度、兎にも角にもあんかむと致し居るへき時に候はす、常々父上より、昔しの人の御もの語りを聞しも、斯様の時さ存候、尙又國元親々がたの身の上の御世話、また私は、か斯様に髪の上よりつま先まで、當世の品々をとゝのへ頂き、かほど迄御二親の御目かけ玉はり候を、國の親々がたにも見せ度存し、宜しき衣類品々、今度みな持參り候、又おこさま、乳を尋ねられ候はん、又母上には勝手廻りに煩はせ参らせ、眞とに御氣の毒さまにて、私はいか程の罪あるものか、御ゆるし玉はれかし、至様にも、今度下縣の事は、少しも御嘲し申上たる事に候はねは、御歸京の上嘸かし御驚き可被遊さ、さつし上候、又私此後登山に付、食米其外別段に用意佐藤方に頼み置候に付、御心配に及び不申候、扱は今後私のふるまふ、御方くわきて至さまより、幾程の御しかりを受候とも此事計りは思ひ止まりかね、ふみ切り下縣致し候、何とそあしからす思召、唯々御平らかに、いらせ玉ふやう願ひ上うり

かし、

九月四日

御母御ぬし

御殿場停車場前にて

千代子

十月八日

和田様

御殿場驛より

しの上、萬々御禮申上可候、めてたくかしく。

其ノ二 いよく登山さいふ時に、後援者たる中央氣象臺技師

和田雄治に送つた手紙

一筆申上より、いた御目もしは不申上候へ共、益御きけんよく被遊御座候、めてたく存上より、扱此度至思ひ立に付ては、不一方御世話被成下候趣、毎度同人より承はりつゝ、今迄つい御無禮申上候、同人も常々は至つて達者には御座候へとも、此度一人にては何分氣づかはしく存候に付、かねて同行たのみおき候へ共、同人は一切取用ひ不申、去りながら萬一病の爲に本望を遂かね候事も候はゞ、事の關係やうゐならず存候に付、強て登山致す事に決心致候、尤も不意に登り候ごも、食物衣服外に一人分かねて中烟へ世話相頼み置申候付、其邊御きづかひ被下間敷やう願上申候、私登山の事、見合せるやう御申聞の程は恭けなく存候へ共、何分無餘儀義理にからまれ候事柄に御座候故、思ひ立たる事のやみかたく、内にて家を守るは女の道と申事は、重々存しながら、登山致し候事、さし出ヶ間敷との世のそしりはのかれ不申候へ共、との道不孝不慈のさがは免かれ不申と覺悟致候、尙御願ひ申上度は、もし氣象學會に婦人の入會御差ゆるし被下間敷哉、兎に角會費相添御願ひ申上より、明朝は是非とも登山致度、彼此取込御無禮申上候、明年下山御めも

追記——「小國民」第十一年第十四號は副題を「富士山奇觀」といひ、全篇富士山の記事で埋つてゐるが、他に見るべきものはない。これは小島烏水が手を加へて單行本「富士山大觀」となり、明治四十年八月如山堂から發行されたが、何故か芙蓉日記は省いてある。爲に、後世にまで珍重される資格を、失つたのである。尙「芙蓉日記」は同じ著者、同じ書名の單行本があるやうに聞いてゐるが、未だ遇目の機會を得ない。從て此處に解説したものと同一なりや否やを知らぬ。諸君の知人で御持ちの方があつたら、是非御紹介下さる様、お願します。

### 雨の湯澤行

本シーズン後ごも先ごも只一回のスキー行、非常に樂しみにして大分皆悪友を誘つたのだが賢明なる諸君は遂に來なかつた。僅に近ちやんのみ。神樂の眺めを語り、清八の斜面を夢見ながら湯澤に向つた。車中は珍らしく人數少くこゝにも賢明なる諸君が多かつた。小生得意の空氣枕を出して寝たがそれでも近ちやん程は

寝れなかつた。湯澤に着いたら猛烈の雨じやありませんか。最早雨の上るのを待つなど考へる餘地はない。今日は湯治と觀念して直ちに高半の番頭を呼んでビチヨ濡れになつて宿に入つた。道々立派な別館が出来たさうじやないかなごとおだてたのだが先もさる者目が高い。別館には案内しなかつた。併し二階で飯士に向ひあつて、國境の山々を一目に見下す。(いや着いた時は雨で何も見えぬ) よい部室だつた。暑くもないお湯にひたつて直に寝てしまつた。

處がです、この雨の中を練習してゐる熱心なと云はんか、馬鹿と云はんか、負け惜しみの強い奴と云はんか、大分滑つて居るには驚いた。晝近くなつたら急に猛烈の上天氣になつて來た。滑る氣もしないが此處まで來て滑らないで歸るのも惜しいと云ふわけで布引スキーフと云ふのに出で見た。二時間ばかり滑つた。

こゝで小生生れて始めての寫眞を撮つたのです。コーチは近ちやんです。寫眞が撮れて居つたらおなぐさみ。失禮なことを言つちやいかんと近ちやんにしかられる。兎に角どんなのが出来るか、良く出来るか如何かよりも写つてゐるか如何か問題です。併し畫才のある(その邊で九郎ちゃんが笑つてゐるかも知れん)小生のこと故、位置のとり方などはその邊の連中とばらがうはづだ。

こんなことで今年のスキーは徹頭徹尾失敗に終つた。親に別れる様の年じやもの良いことはないはすだ。併し爲に近ちやんにまで迷惑をかけて誠にすまなかつた。

(三角)

## 四月末の木曾駒行

(クマ)

一行名 マゴ ペン コン クマ

月日 四月二十七日——四月三十日

四月二十七日——午後十一時五十五分新宿發

四月二十八日

上松(一〇・二一〇——一二・〇〇)——滑川の河原(後一・二九)  
——三合目敬神ノ瀧(二・〇四——二・二〇)——四合目標石(三・一  
二)——五合目(四・〇五)小屋

◇今度の行は仲間の波長が合はなかつた故か又天氣が悪かつた。どうもマゴペンコンの三人の内の誰かが怪電波を發散してゐるらしく此のトリオに加はつた者は大概天氣ぢやひじい目に合ふらしい。何かの御参考にもと一應御報告して置く次第です。

◇次に新宿驛の混み方にも實際驚いた。昔の中央線と考へて廿分位前に驛に着いたのでは座る處がないのは云ふまでもない、うつかりすると立つ場所もなくなつてゐる。此處から出る人は少くとも一時間以上前にプラットホームに立つて居なければならぬ、全く暫く東京を離れて居た田舎者には想像も及ばぬ光景であつた。◇東京から人夫が來なかつたからといふ意味ではないが雨が降つて來たのと荷が相當重かつた爲め本式の人夫を雇つたが之でやゝ豫定の行動がされた事は實際嬉しかつた。何にしても山は無理を

しない事が一番だ。人夫が居なかつたら事によると一晩位野天の雪の中に御厄介にならねばならなかつたかも知れない。

◇五合目の小屋で二十分位は評定をした。之から頂上の小屋までのすか、それとも今日は此處で英氣を養ふかと。結果から見ては矢張り此の小屋で泊つた方がよかつた様に思ふ。

◇此の小屋で夕めしが済んでから座談會をやつた。中心人物は園山だつた。園山は怪しからん、園山は針葉樹會から追つ拂へさいふ事になつたらしいが東京へ歸つて來るとグニヤくになつて了つて「以後注意せよ」位の所で結末がついて了つた様だ。

註（但し當會議の問題は既に解決済の由筆者より報告あり）

◇此の晩はマゴさん得意の豚汁を食はされた事は云ふ迄もない。バツシヴになつてゐる處に御注意あり度し。次回からはも少し豚のお顔を拜見出來たらと思つてゐる。

四月二十九日——小屋發（五・二五）——六合目標石（六・一一）——六合半小屋跡（六・四〇）——七合目遠見場（七・〇〇）——八合目小屋（八・三〇——九・三〇）——木曾前岳（一〇・四〇）——玉窪小屋（一〇・四五）——木曾小屋（一一・〇〇——一二・三〇）——頂上（一・〇〇）——中岳（一・二〇）——宮田小屋（一・四五）——森林帶（四・〇〇）——赤穂口五合目（五・二五）——四合目小屋（五・四五）——三合目（六・四〇）——發電所（八・三〇）——赤穂（一〇・四五）

◇登りは六合目位から雪がはじまり下りは三合目の少し上まで雪があつた。之で見るご木曾駒は東側に多量の雪を降らせららしい

◇八合目的小屋を過ぎて夏道が前岳の南斜面を捲く少し手前の所に急な細い尾根があつた。一步誤まれば命はない頗る危険な場所だつた。マゴさんに掘む武勇傳があるらしいのだが先に行つて居たペニセクマには眞相が判らぬ。之は將來事ある毎には強迫の好資料となる様だから發表は見合はせて置く。

◇頂上直下の木曾小屋には薪がなかつた。昨日此處まで來なかつたのは天の助けでもあつたらう。

◇頂上の積雪は約五尺といふ所。

◇宮田小屋は屋根だけしか出て居なかつた。

◇前岳の三角點を過ぎて森林帶へ這入る間で濃霧の爲め見當がつかず二百米突許りの降りに一時間二十分許りかゝつて了つた。

◇それから雪の全くなくなる迄歩く度にズブリ／＼さもぐつて了ふので實際氣はせくし癪には觸るしあんな嫌な思ひをした事がない。

◇三合目を過ぎて暫くグル／＼平につけられた山道を歩いてフト遙かの方に赤穂の燈が見えてからの長かつた事、關節は痛む腹はへる、ねむくはなるし、全く閉口頓首の態であつた。

◇宮田小屋から赤穂までは丁度十年前に通つた事があるのだが全く記憶にあるものご様子が違ふ。此處でも人夫を連れて来てよかつたなあ／＼つ／＼感じた事であつた。

◇赤穂へ着いて直ぐハイヤーで辰野へ出る積りで交渉したが上りの夜汽車に間に合はぬと知れて驛前の三升屋とかいふ商人宿へ泊る事にした。茶代を置いたらバットを一つづゝ呉れた、そして幾度

も幾度も御禮を云つて居た。ブルジョア相手の宿屋には見られぬ親切と親し味がある。向ふは商賣とは云ひ乍らも俺達のドロだらけの靴や靴下、貧乏臭い水にグショクの上着を見たつて別に嫌なしかめつ面もしないで待遇して呉れたのは實際嬉しかつた。それに一時にねて三時半には起して呉れ驛までも荷物を運んで呉れたあの親切な女中(?)さんの顔も忘れられないものゝ一つだらう。世の中さいふものはこう行かなければいけないのだ。人間愛の本然の姿さいふものは上方の人々?にはわからなものだと思ふ。◆登山報告が變にひねくれたものになつて了つたがいつもの癖だから勘辨してお貰ひいたしやす。

### 岑一と名づけたるは

僕は男の子には山とか雪とかに縁のある字、女の子には谷とか草に縁のある字を名づけることに定めて居つた。今度は男の子だから第一に辭典を引いて山の處を見た。山には五あり。山は山の總稱とあり、岳は大きく高き山のみを云ふとあり、この字が一番よいと思つたが僕の兄の二番目の子供が岳二と最早先に取られちやつたので此は駄目、次に丘は小さき山とあり、岑は山の連りを云ふとあり、これは音が面白くない。次に岑は山小而高也とあり又山の頂を云ふとあり。これは角も少しし感じもスマートであるからこの字に定めて岑一と名づけた。處がこの字は訓はミネ、音はシンなんで大體の人はキン一と讀むだらうと思つて一寸子供に居るが最早大抵良いんださうだが、未だ今月中はかゝるらしい。

ら云ふと岑と書くと良いが岑と書いてはいけないんださうです。なかく六ヶ敷い。皆さんどうかシン一と讀んで岑一と書いて貰ひ度い。

(三角)

### 生 活 三 題

(松木生)

湘南のハイキングコースに鷹取山、神武寺と云ふのがある。根岸の海岸から杉田に出て金澤八景を見物、追濱から登りにかゝつた。驛の直ぐ後に見晴臺と云ふのがあつて追濱の飛行場から金澤八景を一目に見下す處です。航空母艦が一隻、島の様に浮んでゐる。鷹取山と云ふのは敷石を切り出した爲に跡がきつたつて妻晴しくければしい山になつたのだ、見晴しだけは實際よい。横須賀、田浦、追濱、金澤の海岸から本牧の鼻まで一望の中に納め、一方逗子の海岸をも眺められる處なんです。お天氣がよいので、家族連、さては女學校の同窓會と思はしいものまでがやつてくる。實際賑やかだ。パパが十位の子を頭に三人の子供をつれてやつて來てるる一組があつたが、これは大分危い處にも平氣で上つてゐた。察するにおやぢ登山好きと見える。俺も直きにこんなになるのかな。神武寺は女人禁制の山だつたとか。椎の老木が茂つてゐる。誠に氣持のよい處だつた。併しハイキングには少し暑い。

× × × × ×

中耳炎と云ふのは長い病氣ださうだが、小生の長男の岑一の中耳炎も最早七十日になる。照つても憂つても一日も休まず通つて

このお医者さんが丁度雲ちやんがそつくり反つてゐる明治屋本店の近くにあるんで、電車を下りるのが明治屋の前なんだ。ところが明治屋のショーウィンドウには一杯に綺麗なお菓子が列んでゐる。毎日長男のお医者さんにくつゝいて行く長女の渙子が毎日の様にこれを見つけて動かない。さては道の眞中に坐つて動かなくなるさうだ。毎日この難關を如何にして切り抜けるかが家の女房の一苦勞なんださうだ。明治屋も罪なことをするよ。

× × × ×

蟹が二十八掛であらうが三十掛であらうが恐らく針葉樹會員には大した問題ではなからう。併し此頃は毎日この相場とにらめっこをしてゐるんだ。最近は大分慣れて來た。毎日製糸家の書き出す昨年の成績を詳細に調べて今年の豫定表眺めてゐるんだが何しろ價格の上下の激げしい且十日位の間に半年分の原料を仕入れる製糸家相手の貸付はむづかしい。昨日迄で大抵貸すか貸さぬかは定つてしまつたが、さて明日からの相場は如何か、明日あたりから十日間位で關東、信州の蟹は大半出て來るのだ。製糸家が今年は儲けるか損するかこの十日間で定められるわけなんですよ。

(六月九日)

## 山 岳 部 報 告

日 誌 (五 月)

定期部員集會 五月二日(木) 於國立部室

(出席部員) 本科七名、豫科六名

谷川岳新入部員歡迎登山の事等を相談する。

先輩學生合同懇親會 五月十二日(日) 於國立部室

(出席者) 先輩九名(學生)

林、柿原、鷹野、小林、小

谷部、望月、岩崎

出席者合計十六名、人數も多からず、少なからずお天氣は幾分悪かつたが、例のスキヤキで盛會。

此の日夕刻、望月、鷹野兩名磯野氏宅にうかゞひ、故中島嘉一郎氏の部に寄贈される藏書をいたゞいて歸へる。目下整理中。全部で八十七冊(内譯洋書六冊、紀行に關するもの二十三冊、案内六冊、研究隨想二十二冊、機關雜誌類三十冊)

専問部新入部員歡迎會 五月卅一日(金) 於國立部室

(出席者) 新入部員を合せて九名

(新入部員) 松浦靜雄、大島秀雄(以上專二)

谷ヶ崎龍二、水永毅六、湯村信一(以上專二)

記 錄 (五 月)

谷川岳(新入部員歡迎登山)(五日)林、小柳、柿原、望月、鷹

野、森川、鷺崎、佐々木、西野、原、(以下新入生)

日江井、齊藤、毛塚、大塚、鈴木、奥山、秦

神津牧場(六日—七日)林、小柳

大岳山(十九日)森脇

神津牧場(十九日)新羅、松浦

富士山(廿五日—廿六日)小谷部、森脇、塚本

以 上